探索活動をしながらの独語的Vocalization は母親の存在による安定感を示しているようであった。③Lookingは母親に対するものより，Stranger に対するものの方が多かった。このことはLooking という活動が接近，接触にかわるdistance interaction というばかりでなく，新奇性に対する好奇や不安を示すものと云えるのであろう。

(2)U.S.A.の資料との比較 ①strange situationへの慣れは日本の子どもの方がおそい。②日本の子どもはSmiling が少ない。③日本の子どもはStranger に対してアメリカの子どもよりacceptable ではない，などの差異がみられたが，全体としては一致点の方が多かった。

(3)Strange Situation での行動と他の要因との関連，①家庭における母子の接触量が多い子どもはStrange Situation においても母親に対して接近・接触をより求め，逆に接触量の少ない子どもは回避行動が多い。②家庭で子どものVocalization に敏感に反応する母親の子どもはStrange Situationで母親に抗議行動を示すことは少ない。③欲求即応型の授乳を受けた子どもはdistanee interaction をより多く示す。④家庭でのアタッチメント行動が活発な子どもはStrange Situation での接近．接触を求める行動が多い。⑤A群（avoidant group）は日本児の方が少なかった。

母子の分離・自立ー予備観察ー

依　田　　明

幼児は発達にしたがって，母親との共生関係を脱し，母親から時間的にも，距離的にも離れていることができるようにならなければならない。子どもによっては，なかなか母親から離れられず，自立的な行動ができないものもいる。

本研究の目的は，母子の分離・自立行動の発達を規定している要因を明らかにすることになる。この規定要因にはさまざまのものが関与していると予想されるが，子ども側にあるもの，母親側にあるもの，家庭全体にあるものを総合的に検討していく予定である。

本年度は，上記の研究のための予備的な調査をおこなった。

財団法人小平記念会，家庭教育研究所では，3歳児の母子を週一回来所させ，健全な母子関係を確立するために，母子教育を1年間おこなっている。来所している母子は，約80名である。10月に入園し，つぎの年の9月に終るというサイクルで，カリキュラムがつくられている。

この家庭教育研究所に来所している母子を対象に，母子の分離の状況を観察した。

朝，母子ともども来所して，すぐに母子の分離ができ，子どもはプレイ・ルームへ，母親は母親教室へ，スムーズに行けるものは母子分離ができていると判断した。

母親と離れることができず，母親にしがみついたり，泣いたりしていて，プレイ・ルームにはいれないものを，分離ができていないと判断した。

この両者の中間にあるもの，たとえば一度プレイ・ルームにはいりながら，しばらくすると母親を求めるもの，ある週は分離ができたが，翌週になると分離ができなくなってしまうものを不安定なものとした。

55年10月入所時では，分離ができているもの42パーセント，分離できないもの22パーセント，不安定なもの36パーセントであった。

それが，4カ月たった56年1月では，それぞれ60パーセント，18パーセント，22パーセントとなった。

分離できないものは，この4カ月で4パーセントしか減少していない。

本年度は，さらにきめのこまかい調査をおこなう予定である。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

幼児は発達にしたがって,母親との共生関係を脱し,母親から時間的にも,距離的にも離れていることができるようにならなければならない。子どもによっては,なかなか母親から離れられず,自立的な行動ができないものもいる。